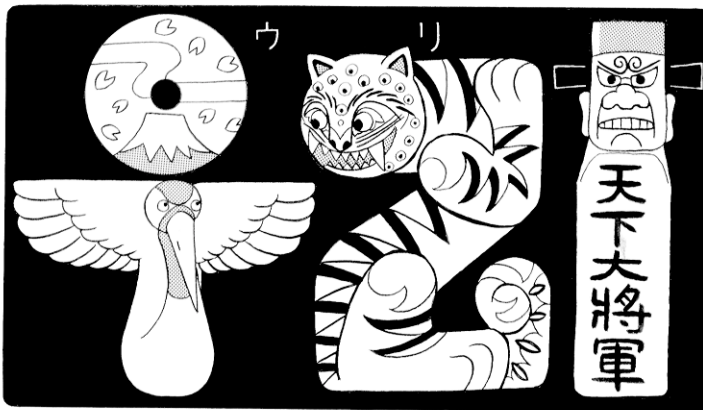




日韓合同授業研究会会報

第 8 4 号

2013 年 2 月日発行

沖縄戦の韓国での聞き取り調査の参加報告

川辺

2012 年 2 月に続く、韓国・ソウルでの 2 度目の 2012 年 12 月の聞き取り調査に、私は初めて参加した。K さん・H さんはすでに 2 月も参加された。2009 年の沖縄での交流会開催にむけて下見に行った時と同じメンバー、Y・K・H・川辺であることに気がついた。その際、沖縄教組の Y 委員長が丁寧な案内をして下さり多くを学ばせてもらった。その 1 つが、「平和の礎」（1995 年戦後 50 年を記念して建設）に、当時日本の植民地支配下であり共に沖縄戦を戦った韓国人の名前が 365 人しか刻まれていない。すぐ近くに韓国が建てた慰霊碑（1975 年建設）には 1 万人が沖縄戦で犠牲になったと刻まれている。日本人の犠牲者は都道府県別に名前が刻まれている。この違いは？何故？このままでよいのかという問いを投げかけられた（交流会当日のフィールドワークの案内の記録は報告書の 77 頁に載っている）。その後、済州島、旌善、飛鳥と交流会を重ねながら、Y さんは、この空白を埋めたいと「沖縄調査委員会」をつくり、大久保小退職後、沖縄に移住、琉球大学講師をし、韓国に足を運び韓国の委員会と連絡を取るなどして、遺族から直接お話を聞く・聞き取り調査をするようになったと理解している。

私自身は、「沖縄調査委員会」について、これまで断片的に目や耳にするだけであった。Y さんはエネルギーに周りを巻き込みながら進めてこられた。出かける 1 ヶ月前、「第二次大戦時沖縄朝鮮人強制連行虐殺真相の研究の中間報告」（65 枚）として、パソコンメールでその後の経過も含めて伝えてくれた。そこには、聞き取りは時間との競争になっていること、広く伝えていくためのメモリアル館構想も述べられていた。が、一度も委員会に参加したこともない私は、理解不十分のままの参加であった。韓国語能力もゼロに等しい。初めての冬のソウル、記録のためにビデオの用意をとの連絡。時間的に参加できる、行ってみようとなったけれど。とりあえず、頼みの H さんが予約したホテルと飛行機に合わせて予約出発、という心許なさで聞き取りの旅が始まった。結局、ビデオは雁部さん、インタビューは

目次

沖縄戦の韓国での聞き取り調査の参加報告	1
朝鮮民主主義人民共和国訪問	1
短信	2

YさんKさんが進め、Hさんが補足の質問をするという形で進められた。カメラとICレコーダーを持って記録の一端をと用意したが、1日目は何故か、動かせず、気後れで正面写真がとれていなかったり、反省ばかりでお役に立つことはできなかったが、その場にいたことで吸収することは多かった。まとめられた記録を参考に感想を含めて報告したい。

1日目 2012年12月21日 「日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会」

C 調査二課課長へのインタビューと話し合い（要旨）

日韓合同授業研究会の交流会の報告書をお渡し、訪問の目的を伝え、始まった。

- 1, 委員会は6ヶ月延長することになった。30位の団体が要求したことが背景にある
- 2, 来年、釜山に7万㎡の敷地に歴史館が開館する。天安（チョンナン）にある「独立記念館」の側に建てようとしたが、プライドが高く、強制動員の被害者は日本への協力者、慰安婦の問題もあるからと否定的だった。展示内容については「日帝強制 動員と平和研究会」は計画を持っているが、政府の計画は分かっていない。
- 3, 真相糾明委員会は、慰安婦問題に取り組んでいく。調査二課では、慰安婦調査で新しい3人の方を見つけた。離散家族に知らせた。来年には、「慰安婦口述白書」を発行する予定。来週は「中央日報」で慰安婦特集が組まれる予定。又、委員会では「真相調査報告書」を出す。
- 4, Yさんより
台湾の犠牲者が多いことが分かった。「平和の礎」には34名だが、実際には4000名いたといわれる。台湾には、真相糾明委員会のようなものがなく難しい。1980年頃まで、軍隊の中に慰安所があり、女性受刑者が慰安所で働くと言罪が軽くなるということさえあった。
- 5, 日本語と韓国語の両国語で「日帝強制動員と平和研究会」から2013年10月に、報告書として本を作成しましょう。

Cさんは、歴史学の博士号をもつ研究者であり、強固な意志と優しさを合わせ持つ方に見受けられた。これまでの調査活動の報告書の中から、それぞれが、「2012 国内外関係者招請ワークショップ資料集 日帝強制動員真相糾明の今後の課題」「写真で見る強制動員の話 日本北海道編」と「曹洞宗宗務庁企画 人権啓発ビデオ『無縁遺骨 過去・現在・未来—朝鮮出身者の遺骨はなぜ残されたのか—』（日本語）」「1992年11月20日 曹洞宗宗務総長 大竹明彦『懺悔文』」などをいただいた。

盛んに降り始めた雪を心配して傘まで貸してくれようとして下さった。通訳の労をとられたLさんも一緒に記念写真をとり、世宗大路に出た。

2日目 12月22日 O.Kさんに聞く 板門店近くの汶山にて

兄・Y.Kさんと家族の話（要旨）

1927年頃、父母は姉2人、兄1人をつれて和歌山に来て、1931年にそこで生まれたのがO.Kさん。父親は、自転車で商売をしていた。5つ上の兄・Y.K容五さんは、1943年18歳で軍属になり、輸送船員として働き、最後はフィリピンから日本に戻る途中、1944年2月20日、19歳で死去した。破船して行方不明ということで、あるいは中国で生きているかもしれないとお母さんは占い師に見てもらうなど大騒ぎをしたり、両親の心配もすごかったのですずっとつらかった。その後保険料も出たりしたからお母さんもあきらめた。兄は輸送船

に乗るとき、船が壊れると海で魚に食べられると、2, 3疋の赤い布を作ってくれとってお母さんが持たせたのを憶えている。手紙も時々きて、船が日本に着くと度々家に帰ってきた。

O.Kさんは奈良県の五條市の国民学校高等科の2年の時に解放され、1946年11月15歳の時に大阪からヤミ船で来た。小さな船に230人も乗って、座るところがなく、23日位かかって麗水(ヨス)についた。財産もなくなり、山の奥に入って生活し、17歳の時から食堂をして、18歳の時、朝鮮戦争の頃で、共産主義者が山に入ってきたということもあり、父親のすすめで顔も知らない人と結婚して苦労した。父母共に80過ぎまで長生きした。母親は、朝鮮人にみえたので、日本の学校には姉が出席、勉強もできたので、あまりいじめられることもなかった。そろばんも2級で、帰ってから銀行に働かないかと誘われたが韓国語ができなくて苦労した。戦争が終わったとき、広島の前爆がすごく怖かった。私は日本で生まれたし、日本が勝てばそのまま日本に住めるからよかったが、日本が負けたからという気持ちだった。1998年から毎年、兄の追悼式に沖縄へ行っている。

O.Kさんは、15歳まで日本で育ったので、日本が懐かしいようで駅まで私達を送りながら唱歌を口ずさんでいた。お話を聞く場となった焼き肉店は娘さんの経営する店で、駅前のビルの中の結婚式場も別の子供が経営していると言っていた。80歳を越えたが、近くにしっかりした子供達が住み、苦労を乗り越え幸せそうに感じた。

創氏改名でH.K、兄はK.Kという名前がつけられていた。

J.Hさん (元明智大学教授、京都大学卒業) 以後同行、同席。

1994年、当時の大田・沖縄県知事に会って、450名の資料を渡され、始めたという。住所を探して、遺族の所まで行って知らせた。1998年政府から資料をもらった。それ以来、独自に韓国国内の沖縄戦資料の分析・調査を行ってきた。98年から毎年、沖縄慰霊の日に遺族をつれて沖縄にやってくる。聞き取りをさせていただいた方々は洪さんに情報を教えてもらい慰霊に行けるようになったと感謝している。又、補償や軍隊のことなど、家族がはっきり分からないことなども、説明して下さった。

N(ナムウヒョン)さん 通訳。次の洪周澤さんの聞き取りの際もしてくれた。

3日目 12月23日(日)午前 C.Hさんに聞く(要旨)

養父・S.Hさんの話 (ソウル・松坡区の駅デパの休憩所?で)

S.Hさんは1921年生まれ、1945年5月22日首里城決戦で死亡。高麗大学の前身・普成専門学校在学中の1943年1月20日学徒兵として強制召集。学生5500人が強制召集されたがその1人。66大隊・独立工兵隊32軍に属した。

結婚のため故郷にいたときに召集された。結婚して3日目であった。女の方が死後も婚家に止まるのは父が間違いだとして実家に戻った。

C.Hさんは戦死したS.Hさんの養子となっている。実父は祖父の次男、養父は五男。洪周澤さんは1945年6月25日生まれで、養父はすでに亡くなっていた。祖父母の元に行き、祖父母亡き後は祖父の再婚した祖母を養い、養父の祭祀(チェサ)を行ってきた。J.H先生から知らされてからこの10年、40~50人の方と沖縄の慰霊祭に参加している。現在、遺族会の副会長をしている。

父の兄弟5人のうち2人は中国に逃げ、1人は日本で学校に行き、あとでみんな帰ってきた。父の家は、農家だが、祖父が書堂(ソダン)をして尊敬されていたので、韓国戦争の時もあま

Pa

り被害を受けなかった。

韓国と日本の未来のために何か話して下さい、と促されて、「死後の養子ということで補償金もでない。が、そのことを求めているのではなく、日本政府が調査も支援もしないことが不満です。やられた側でなければ分からないこの痛みを一緒に感じてほしい。日本が起こした戦争でこんなふうになったのだから、そのことを日本人は認め、謝らなくてはならないと思います。日本の民間人が遠くまできて、このように調べたりしているのはありがたく感謝しています。」と述べられた。

S.H さんには、実業の世界で充実した仕事をしながら、儒教的伝統を守り義祖母の世話や養父祭祀の務めをきちんと果たしてきた人間的な大きさを感じた。それだけに同じアジアの一員として、その言葉と気持ちをしっかり、日本社会に届けたいと思った。

3日目 12月23日(日) 午後 C.C さんに聞く(要旨)

兄・J.C さんの話 (ソウル・永登浦区の駅デパの喫茶店で)

J.C さんは1921年1月11生まれ、1945年4月2日、飛行66戦隊の大尉(死後少佐)として、沖縄海上で戦死。創氏改名で高山昇と文書では記載。

陸軍予科士官学校、陸軍航空士官学校、合わせて5年間の教育を受け卒業、陸軍航空少尉となる(1943、5、27)。福島県原町基地で訓練(往復襲撃部隊2人乗り。後ろに少年飛行兵出身の通信兵が乗る)、その後、満州の千振飛行場へ。特別操縦見習士官の教官を務める。

1944、6 66戦隊はフィリピン・ルソン島に移動。

8 中尉に昇進。全60機出撃。生き残る。神九特別攻撃隊の最初。

11 再編のため、日本に帰る。

1945、1 休暇中、健康調査で訪れた千葉の飛行場の医務室で事務員の H.U さんと恋する。清津に住む母親代わりの姉の許可を得て婚約。梅沢さんの両親には、東京生まれとウソをついたが、実の親のように親しんだ。

(2 アメリカ軍、硫黄島上陸、戦況悪化)

3、25 66戦隊再編。銚子飛行場から万世飛行場へ。

4、1 12機で徳之島に発進。

4、2 臨時大尉となり66戦隊 99 式襲撃機7機の編隊長として出撃。3機が未帰還。うち1機にCさんが乗っていた。初めの記録では「生死不明」となっており、特攻ではない。

(2008年 防衛省の史料館より資料を取り寄せ、兄の死亡を確認した。)

1945、8、15 ソ連軍と人民軍が清津より上陸、家は親日派とされて、赤い徽章をつけた人民軍にやられた。2番目の兄が警察・公安の幹部だったので敵愾心をもたれた。兄の資料は焼いた。母親はロシア生まれで母の親戚はロシアに住んでいた。父とはロシアとの国境で結婚した。母が昔お守りをした甥がソ連の陸軍諜報部隊にいて母を



探して保護してくれて助かった。彼の助言で南に避難した。

『開聞岳』（飯尾憲士著 1985年集英社）は崔貞根（高山昇）がモデルの小説である。

靖国神社に祭られている朝鮮人は、21,609名である。

日本政府から軍人年金は支払われない。日韓条約でもらえるはずの補償金は朴正熙の野郎が勝手に使ってしまった。日帝強占下強制動員被害真相糾明委員会は、尉官級以上は被害者と認定しない。

90歳近い高齢なのでお住まいの近い所にしようと、クリスマス直前の日曜日の百貨店の喫茶店の喧噪の中で行われた。通訳なしで話して下さったが、最後の方は、よく聞き取ることが出来なかった。崔さんは慶大卒で、自ら調査をして事実を明らかにしてこられた。その情熱と行動力に敬意を抱いた。

聞き取りが終わった翌日、凍てつくソウルの街を、日本大使館に向けて歩いた。白い雪をまとった北岳の前に景福宮、復元された光化門の近くに、防備に身を固めたように日本大使館があった。その前に、ちょこんと可愛らしい従軍慰安婦像があった。見過ごして通り過ぎてしまいそうに座っていた。同じアジアの、長い交流・交易の歴史がある隣国で日本を代表する建物が、以前見たイスラエル大使館の佇まいに通ずるものがあり残念に思われた。私達の会のように率直に、自然体なお付き合いができるようになるには、まだまだ向き合うべき真実が多いのだと思う。

それぞれの国の中にも対立や課題がある。韓国国民の中の「戦争協力者」「従軍慰安婦」への蔑視。戦前・戦中の日本国民は被害者であると同時にアジアへの加害者であったという両面からの理解の欠落、さらには、戦争があったことすら知らない人達が増えている。2011年、震災の中で起きた原子力発電所事故による放射能汚染は、あの戦争以上に被害者であると同時に加害者になっていることの静かな真実の進行。今回のアルジェリアのイスラム過激派と日本の資源プラントの企業戦士。「テロ」を憎むに止まって再発防止になるのか？

Yさん、Sさん、Lさん Yさん、Uさんはじめ、韓国の会員のみなさんからも温かい心遣いをいただき、厳しさの中にも、次への半歩を意識できたような気がします。同行して下さったメンバーありがとうございました。

朝鮮民主主義人民共和国訪問記録

藤田

訪問への夢

日韓合同授業研究会のKさんから、以前より話の出ていた共和国訪問の具体的な話をいただいたのは、2年前だった。一昨年、昨年は諸般の事情で断念したが、今年こそと、埼玉訪朝団への参加を決めた。

日韓合同授業研究会では、発足の時期より、韓国の教員との交流を行うに当たって、在日の存在を抜きには考えられないと考えてきた。1998年第4回交流会では、K（墨田区立木川小学校）、P（東京朝鮮第五初中等学校）による「皮革工場・屠畜という仕事」が報告された。両校の子どもと一緒に、皮革工場を見学したとき、朝鮮学校の子が「くさい。」と言ったことから逆に交流が深まり、お互いの存在を認め合っていくという報告であった。その後も韓国の教員と

Pa

一緒に朝鮮学校を訪問したり、朝鮮学校の教員が交流会に参加したりするなどの積み重ねの中で、私自身の共和国訪問への夢は築かれていた。

訪朝に当たって、勤務校への届けを行った。初めに学校長に話に行くと、「少し待ってほしい。」と言われた。最終的には、「藤田さんは、市民の交流からつなぎたいということなんだろう。」と理解を示され、共和国への旅に出ることになった。

中国経由で平壤へ

8月22日早朝出発。北京につき、観光した後、食事をしてホテルへ。翌朝、北京の北朝鮮領事館でビザを取得する。領事館の周りはコリアンタウンが形成されていた。領事館に入って驚いたのは、キリスト教関係のグループで、直前に8・15東京集会を一緒に担っていた人がそこにいたことである。彼は神奈川訪朝団として参加とのこと。

13:00 北京を出発し、高麗航空で平壤へ。飛行機には神奈川訪朝団の他、共和国の「青年の日」に参加する朝鮮大学生やデンマーク人のグループ、中国の大会で優勝したサッカーチームが乗っていた。高麗空港は小さな空港で、私たちの飛行機の他はプロペラ機ばかり。建物は平屋。これから大きなものを作る計画があるらしい。入国は軍服の男たちに囲まれ、荷物検査に時間がかかる。携帯は、ここで集められ預ける。三菱製の古いバスに乗り込む。隣には、ベンツが停まっていた。

夜は、対外文化連絡協会の局長と二人の局員が歓迎の宴を設けてくださった。この二人の局員がその後の案内と通訳をしてくださった。日本の侵略には、侵略を行った為政者や軍人と民衆を分けて考えるとといった話が印象に残った。



主体思想塔から見える平壤

8月24日(金)

万寿台で献花 金日成・金正日両指導者の大きな像の両側に群衆の像。先頭の人 は 共和 党 宣 言 を 抱 えて いる。打倒帝国主義の文字が見える。対峙するのは日帝。ハンマーと筆と鎌をモチーフにした朝鮮労働党創建記念塔を観てから主体思想塔に登る。150mの高さの展望台から平壤が一望できる。予想よりずっと大きく、遠くまでビルが広がっている。大同江の対岸では、子どもたちが「青年の日」に向けて人文字の練習をしている。

ホテルで冷麺を食べた後、散歩。平壤駅の周り は 人 で あ ふ れ て いる。満員のトロリーバス。「共和国名物」の女性の警官が交通整理をしている。切手博物館では、小泉訪朝の切手を見つけた。

午後は、朝鮮中央博物館。金正淑託児所を訪問する。500人規模の大きな保育園。充実した設備、備品。お医者さんごっこや楽器の演奏など、お客さん用のプログラムの他、「知育」のような遊びをしているところが見られた。夜は、アリラン食堂でチヂミ、豆腐焼き、石焼ビビンバ。

8月25日(土)

ホテルの朝食はバイキング。ヨーグルトがおいしい。

徳興里壁画古墳へ向かう。バスの中で共和国の生活について話を聞く。マンションや歩道の

花壇を整備している人達がいる。市民が奉仕活動を行っていると言う。1次生産に携わらない人は金曜労働というものがあるそうだ。マンションの窓にも花が見える。援農やキムチ休暇などの制度もあるそうだ。数年前の水害を乗り越えて、復旧が進んでいる。道路工事は、機械がなければ人力で行う。3年前には考えられなかったという交通渋滞もあった。農村部では、牛やヤギ、羊が飼われている。トウモロコシ畑がどこまでも広がる。

徳興里壁画古墳は、5世紀初めの高麗王朝高級官の墓とのこと。色鮮やかな壁画古墳を生で見られたことは、驚きであった。

平壤市に戻り、高麗駅から栄光駅まで地下鉄に乗る。150mのエスカレーターには、座るなど注意書きがあるが、少年やおばあさんが座っている。広いホームにはシャンデリアが光る。料金はバス、トロリーバス、地下鉄がすべて同じ値段で5₩。市民の足となっている。

昼食後は朝鮮芸術映画撮影所見学。夕食後アリラン公演見学。壮大な人文字。日帝による困難な時代を乗り越え、民族の力を合わせて新しい時代を切り開こうというストーリー。中国との連帯を表現する場面では、中国人観光客から大きな声援がおきた。案内の金さんは、「いつか日本との連帯コーナーができるといいですねとコメント。」金さんもアリラン祭に出演したことがあるという。最後に人文字で青い朝鮮統一旗がつくられた。帰りには、美しくライトアップするビルを観た。電力が整ってきていることを示している。

8月26日（日）

8時に出発して板門店を目指して開城に向かう。授業研究会員であるYさんIさんのお子さんと出会う。母方の祖父の墓参りを目的に参加したそうだ。板門店では、ビザをチェック。笑顔の兵士が案内してくれた。中に入るときは、バスから降り一列になって中へ。細い通路の両側には、有事の時に石が落ちて戦車止めになる仕組みがあった。板門店の先には韓国旗が見える。板門店にはこの日、韓国の兵士は姿を見せない。韓国の観光客が中に入ると、逆に共和国の兵士は奥に戻る。南北戦争休戦調停を行った建物を見学。

帰りには、高句麗の始祖である朱蒙の東明王陵や法隆寺と同じ一塔三金堂形式の定陵寺を見学。昼は、開城の古い家が残っている場所で宮廷料理。共和国のビールは実においしい。



8月27日（月）

大同江果樹総合農場を見学。広大なリンゴ園には背の低い樹が整然と並んでいる。りんごをいただいた。すっぱさおいしい。すっぱんや食用の牛ガエルの養殖も見学した。先進的な機械管理の養殖場であった。

市内に戻り、朝鮮対外文化連絡協会の洪善玉副議長の話を伺う。「総連や埼玉訪朝団の紹介ならいつでも共和国は受け入れる。」と言われた。朝鮮文化宮殿を出るとき、Kさんが朝鮮学校の学生に声をかけられた。彼らが小学生の時、彼らは雁部さんの小学校と交流をしていた。

昼食は有名な平壤冷麺を食べに玉流館に行った。巨大な建物にはたくさんの部屋がある。朝

鮮学校の先生がお勧めのアイスクリームはとても甘かった。

午後はできたばかりのイルカショーを観に行った。月曜なのに満員の会場で平壤市民が楽しそうに過ごしていた。ウォータースライダーのあるプールは外から眺めた。

そして念願の「6月9日大城第一中学校」を訪問。生徒数950名。25教室の学校。共和国の教育制度は、幼稚園5歳から6歳。小学校7歳から10歳。中学校11歳から16歳。そして17歳から4年間大学となる。1年生の生徒は日本なら小学校5年生となる。彼女たちが音楽で迎えてくれた。校庭では、教育実習生が「猫とネズミゲーム」を生徒に教えていた。この実習生は、朝鮮大学の学生だそう。朝鮮学校の教員は、共和国で実習を行っている。

夜は、朝鮮対外文化連絡協会の日本局長を迎えて答礼宴を行った。

帰路

帰りは、台風心配されたが無事羽田に着いた。羽田では、税関でメンバーが集められ、かばんの中を開けられたが、何も取られずにそのまま出国することができた。

百聞は一見に如かずの言葉通り、本当に刺激的な旅となった。行く前と行った後では、共和国に対する見方が変わっていた。教室で子どもたちに「朝鮮」と言うと、子どもたちから、マイナスイメージが返ってくる。そのようなときいつも「国の在り方がどうであれ、そこにいる人全部が悪いわけではないだろう。」と語ってきた。今回具体的に、この国で一生懸命生きている人達の姿が自分の中に入り込んだ。国の在り方についても、別の面を見ることができた。また保育園や中学校訪問で出会った子どもたちやイルカショーや遊園地で遊ぶ子どもたち、人文字の練習の合間にアイスクリームを食べている子どもたち。共和国の教員たちとこのような子どもたちの話をしたいと思った。いつか、日本と韓国と在日とそして共和国の教員が、いっしょに子どもの話をする日が来ることを夢見ている。いつか、その日は来ると信じている。

韓国語・朝鮮語授業の可能性をさぐりつつ

…定時制高校における実践から

遠藤

はじめに

以下は2013年1月、日教組全国教研集会国際連帯分科会で報告する内容の概要である。

筆者は2002年4月以来、地歴科・公民科担当として現在の定時制高校に勤務している。勤務校では、2003年4月自由選択科目「韓国朝鮮語」授業を開設した。

高等学校教育における韓国語・朝鮮語授業は、1970年代の兵庫県立湊川高校、広島電機大学附属高校を嚆矢とする。両校では解放教育、人権教育、朝鮮高校生への暴行事件等との関連から朝鮮語授業を出発させた。東京でも解放教育へのとりくみのなかで1982年より東京都立南葛飾高校定時制において朝鮮語授業必修化がはじまった。その後、大阪を中心に韓国語授業をする学校も増えていった1999年には全国の韓国語教師の教育研究団体であり、筆者もその一員である高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク（JAKEHS）が結成された。

この報告は、勤務校における2003年以降の韓国語授業実践のなかで、生徒が得ることができ

た収穫、そして韓国語授業からの「つながり」、発展を中心に整理し、韓国語授業の今後の可能性、特に他の外国語とは異なる可能性についてさぐったものである。

1 神奈川県立横浜翠嵐高校定時制における「自校方式3修制」開始と「韓国朝鮮語」授業

1. 1 筆者の勤務する横浜翠嵐高校定時制とは

勤務校は横浜市神奈川区の高台にある。全日制は1914年、旧制中学として創立された。定時制は、高度経済成長期の1964年、東京五輪の年に創立された。在学年数は4年が基本であるが、現在は3年で卒業することも可能な教育課程となっている。

2003年頃からは、中国、フィリピン、タイ、韓国、南米等から保護者とともに来日した日本語を母語としない生徒が急増し、現在、生徒約400名中、60数名にのぼる。このほか、保護者のいずれかが日本語を母語としない家庭の生徒もふくめると、外国につながる生徒は約100名になる。

1. 2 英語以外の外国語と「韓国朝鮮語」

自由選択科目の外国語科目(各2単位)として、「ドイツ語入門」、「中国語入門」、「韓国朝鮮語Ⅰ」、「同Ⅱ」をおいている。

「中国語入門」以外の科目は、在職している専任教員それぞれの得意分野を生かして開講した。すなわち「エスペラント語入門」は国語科教員、「ドイツ語入門」は数学科科教員、「韓国朝鮮語」は地歴公民科教員である筆者が担当した。これらに対し「中国語入門」は、中国から来日した生徒を中心に日本語を母語としない生徒が増加するなか、国際理解、異文化理解の観点から開講した。授業担当者は開講以来非常勤講師である。タイ、フィリピン、南米等から来日した生徒も在籍していることを考えると、中国語同様、各言語授業開設が望まれる。さらに母語、母語文化保障の制度化、教育課程での位置づけが課題である。

「韓国朝鮮語Ⅰ」、「同Ⅱ」の履修者数は下表のとおりである。

《表「韓国朝鮮語」履修者数の推移》 人数は年度当初のもの。社会人聴講生もふくむ。

年度	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	計
韓国朝鮮語Ⅰ	36	25	25	15	17	14	17	16	41	34	206
韓国朝鮮語Ⅱ	非開講	11	6	12	4	5	6	非開講	非開講	8	52

2 授業でおこなってきたこと(略)

3 授業における生徒の収穫と学習のむつかしさ

3. 1 日本語との共通点、相違点を意識しつつ学ぶ

生徒は他の外国語と異なり、韓国語授業において特に日本語との対照に目が向くようである。学習の過程で文法の類似性に気づいた生徒は、モチベーションをあげ、学習に引き込まれる。2011年度末、「韓国朝鮮語Ⅰ」受講生徒が書いた文を紹介したい。

- (1) 日本語と似てる所が以外(ママ)とあってちょっとずつ違い、韓国ではこんな言い方なんだなと思った。
- (2) 始め(ママ)は難しそうだと思ったけど、学習していくうちにハングルはローマ字と同じように母音と子音があって、それを組み合わせて読んでいけば読むことができたので、分かりやす

かった。

3. 2 使える、聞いてわかる、見てわかる

以下に紹介する(6)のように、ある生徒は授業のなかで覚えた自己紹介フレーズを実際に使用し、コミュニケーションを試みた。

また(7)、(8)、(9)のように、学習を通してそれまでよく分からなかった K-Pop が聞き取れたり、ハングルが読めるようになってきている。駅の看板をはじめ街中に増えてきたハングルを読み取るのが面白いと言う生徒もいる。(10)、(11)では「わかること」が「楽しいこと」につながっている。

(6)発音が日本語に似ていたり面白かった。今 K-Pop が流行しているから少し使えたりして K-pop 好きの人に好感を持たれたりして楽しくできた。一番良かったのは横浜で待ち合わせをしていたらたまたま韓国の人に話しかけられて韓国語を使えたことです。「パンガブスムニダ、チョヌン ××××イムニダ」と話したら喜んでくれて学校の文化祭の招待の会話だったのだが短い会話・時間楽しく話せて楽しかったです。あと姉が韓国人や中国人の働く人が多い所で仕事をしていてハングルの教えたりと意外に使っていて自分でもびっくりです。初めは使うことないなと思っていたのですが使って役にたちすごく良い先生でよかったです。

(7)好きな K-Pop グループの DVD とかでよく言ってる言葉とかが勉強できたからなんとなく何を言ってるかわかってきました。簡単なものだったらハングルも読めるようになったので韓国コスメの説明が読み取れるようになったのでよかったなと思います。

(8)韓国のドラマとかを見て知ってる単語が出てきたりした。

(9)テレビなどで韓国の町や、コスメ、グルメなどを紹介していると何を言っているか、何と書いてあるのかが勉強したことで少しわかるようになりました。

(10)分からなかった単語が1つ1つ分かるようになっていくのがすごくうれしかったです。

K-Pop のアーティストの歌を聴いていて、習った単語が出てきて訳せたことも、うれしかったです。「発見」って言うことはないけど「うれしかった」ってことがたくさんあった時間でした。

(11)韓国語を学んでよかったことは、TV とかの韓流ドラマを見て勉強したワードが出て、あ!聞いたことある!ってなるので嬉しいです。

あと、駅とかかんばんに書いてある韓国語を少し読めたりでき、友達に韓国が好きな子がいて、ちょっとした会話を韓国語で話したりして楽しかったです。

韓国語を学んで、語学にもっと興味が出てきて、大学も語学系にしたので、韓国語をぺらぺらしゃべれるようにしたいです。

3. 3 韓国語、ハングルのむづかしさ(略)

4 教室内から、教室外へ、韓国、朝鮮へ、在日コリアンへ「つながる」

4. 1 訪韓研修旅行参加

これまで韓国国際教育振興院(国立国際教育院)や神奈川県教委がかかわる日韓高校生派遣・交流事業に6名の生徒が参加し、ホームステイ等をおして「韓国人の心」を直接感じとってきた。2004年夏に参加した30代の生徒はホームステイ体験について「見ず知らずの私を家族の一員のように扱ってくれてとても感激しました。日本とは違う温かみ、熱さを感じました」と語っていた。

2006年秋、2007年秋に参加した10代の生徒はそれぞれ次のように記している。(一部略)

(16)韓国に行く前は、無事に4泊5日を持ち切れるか、正直心配でした。しかし、着いた時にそ

の不安は消え、反対に期待の方が大きくなっていました。

今回見てきた施設のうち、特に印象に残ったのは4日目に行ったオドゥ山展望台です。僕は北朝鮮の景色を目の前に眺めながら、一日も早く南北が統一できるよう統一念願紙にその思いを書きました。

3日目には一番楽しみにしていた明德外国語高等学校訪問をしました。学校に着くとまず生徒たちの熱烈な歓迎にあいました。韓国では反日意識が強いと思っていたので、日本人を歓迎してくれるのか心配していました。でもスターを迎えるかのような歓迎ぶりには胸がジーンときてしまいました。交流会では、韓国の生徒は民族楽器の演奏をし、僕の班は、「チェリー」と「BEST FRIEND」を歌いました。歌いながら、明德高校の生徒たちや研修団のメンバーと一生 BEST FRIEND でありたいという気持ちになっていました。

実は、僕は韓国語の授業を取るまで韓国にあまり興味はありませんでした。しかし、授業を受ける中でもっと韓国について知りたい、勉強したいと思うようになりました。その思いは研修を通してさらに強くなりました。

現地では韓国の伝統を重んじる心、礼儀を大切にする心、人々のあたたかい心などに接し、日本とは異なるものを発見することができました。将来に対する考え方も大きく変わりました。僕は将来日本と韓国、そしてアジアの架け橋として、周りの人たちに韓国の良さ、アジアの良さを伝えることができる活動をしたいと思うようになりました。

今回、50名のうち、ただ一人定時制高校生として研修に参加できたことを自分の中で誇りとし、糧として大切に持ち続けていきたいと思います。

(17) 私は紫雲高校と交流してみて、自分がたくさんの誤解をしていることに気づきました。韓国の人たちが日本人に対してどう思っているのか、特に過去の日本と韓国との間のことについてどう思っているのか、気になっていたからです。しかし、紫雲高校の生徒たちは私たちを熱烈に迎え入れてくれました。

紫雲高校の生徒は日本の高校生より向上心が強く、一人ひとりの生徒が自分の考えをしっかりと持っていて、それでいて友だち同士が助け合い信頼しあって、互いを高めるよう勉強していることを感じました。

私は今回この訪韓研修団の一員に選ばれたことにより私の人生の中で出会えるはずのないたくさんの人たちと出会い、交流し、ふだんできないような特別なこともたくさん経験することができました。

今回パートナーになったソンと別れるとき、ソンは私のために涙を流してくれました。国や言葉の違いを超えた何かを感じた瞬間でした。ソンとは本来なら友だちはおろか知り合うことすらありえなかったはずなのに、日本に帰ってからずっとパソコンでやりとりをしていて、今でも友だちです。今回の研修で得ることができた貴重な経験をこれからの私の人生の中で、生かすづけられるようにしていきたいと思います。

両名とも研修を通して自分に対して誇りを持つようになり、これからの自分の生き方の糧にしようとしていることが読みとれる。生徒たちが直接わが目で韓国や韓国人を見、体で感じることはとても大切である。このような機会が今後も多くあることを願う。

4. 2 文化祭参加(略)

4. 3 神奈川朝鮮中高級学校とのかかわり、「話してみよう韓国語東京大会」参加(略)

4. 4 「ぼく、平壤の順安に行ったことがある」(略)

次に授業以外の場で、筆者が韓国語授業を担当していたがゆえに知りえたことがらを紹介する。

「先生、韓国語と朝鮮語はちがうんですか」と尋ねてきた上海出身の中国語母語生徒の口から、「祖母が平壤順安出身、元朝鮮人民軍兵士、ぼくも順安に行ったことがある」と聞かされたのには驚いた。その生徒の祖母は朝鮮戦争のときに朝鮮から吉林に行き、そこで中国人である祖父と結婚、やがて上海へ移住した。その生徒は祖母の故郷、平壤郊外の順安をともに訪ねたという。

勤務校には中国語を母語とする生徒が多いが、さまざまな歴史のつながりや背景のなかで生徒が日本、そして勤務校に学びに来ていることを知るに至った。

ある10代の生徒からは「小さい頃両親とともに日本国籍をとった。しかし家では正月や秋夕のとき祭祀をおこなっているし、韓国の風習がたくさん残っている。韓国語もいくつも知っている」と聞かされた。これは職員室で当該生徒から「先生、たしか韓国語の授業を担当しているんだよね」と話しかけられてはじまった会話の一部である。

別の生徒は、幼いとき韓国人の親とともに韓国を訪問したことがあるが、その後日本国籍をとったということを私に話したことがある。この卒業生は2012年8月ソウルの韓国外国語大学韓国語夏季語学研修に参加した。来春も3カ月ほど参加予定だという。自身のルーツに関連して韓国語を深く学ぼうという知らせを聞いて筆者はうれしく思った。

これらは、「韓流」ブームがあり、勤務校に韓国語授業があったので、生徒みずから口にするのができたのではないと思う。

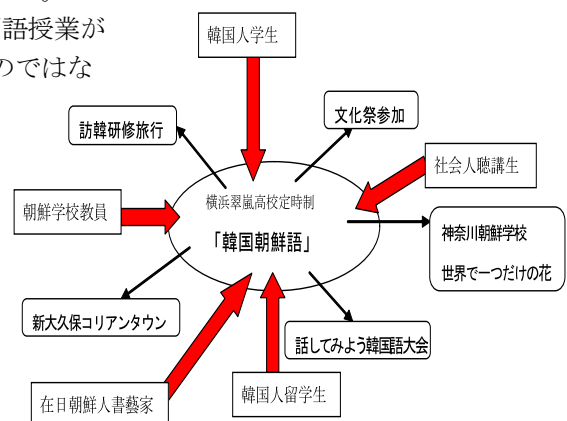
5 まとめ

「韓国朝鮮語」は、生徒を中心にいろいろな人々が交錯する「広場」であり、各方面に出かけていく「拠点」であった。このことを右図にイメージ化した。

多くの生徒はささやかながら自己肯定感、自尊感情を持つことができたと考えられる。また生徒にとって安心感が得られる場、自己のルーツを語ることができる場になっていたとおもう。

韓国語は日本語と対照しながら学び、わかることができ、使える言語である。高校教育においてさらに拡充することがのぞまれる。生徒たちが母語とともに韓国語を身につけ、バイリンガル、トリリンガルになり、東アジアをつなぐ平和的な役割を担ってほしい。

韓国語学習を通じて生徒が得られることはとても多い。今後も大いに生徒を支えていきたい。



ウリ 84 号 2013 年 2 月 日

日韓合同授業研究会

〒102-0074 東京都千代田区九段南 3-9-11

マールコート麹町 303

吉峯総合法律事務所内

事務局連絡先 (事務局長 藤田)

E-mail larribee1991@yahoo.co.jp

会費納入先 郵便振替 00170-1-428530